禅寺丸のふるさとをたずねて

神奈川県農業技術センター横浜川崎地区事務所
関達哉

2016 年 11 月 4 日から 11 日まで、国立ウダヤナ大学学生の学生 2 名を招いて農業交流が行われましたが、その中で 11 月 8 日（火）に、カキの禅寺丸（ぜんじまる）のふるさとを訪ねる見学にご一緒させていただきました。見学では、王禅寺の原木をみたのち、近くの琴平神社を訪ね、その後伊勢原・大山街道沿いのカキ園での収穫作業を行い、ケーブルカーに乗って大山阿夫利神社（下社）を見学しました。禅寺丸のふるさと 800 年の歴史を訪ねる旅を、研修生たちも楽しんでいる様子でした。

禅寺丸は今から 800 年前の 1214 年に、王禅寺（川崎市麻生区王禅寺）の裏山にて発見された日本最古の甘柿といわれています。王禅寺の境内には、今も禅寺丸の原木が立ち、県の天然記念物にもなっています。地域には数多くの古いカキの木がみられますが、これらは 1370 年以降、禅寺丸を地域に普及した王禅寺住職の等海上人の功績とされています。ちなみにこの地域の「柿生」という名前はまさに「禅寺丸柿を生んだ地」の意です。小田急線の駅名にもなっています。

その後、江戸時代になると、江戸では博打と商売にご利益があるという大山詣でが流行しましたが、明倫 3 年（1657 年）の江戸大火には、大山詣での信者が江戸を見舞った折に、川崎の王禅寺から禅寺丸の苗木を持って行き、参道の両側に植えたため、今もたくさんの古い禅寺丸がみられ、子易柿といわれています。災害復興を祈願する人々の願いが込められていたのでは思います。

禅寺丸は明治時代には全国に普及しましたが、次第に他の甘柿に押されて、今では、私たちの食卓に上がることはなくなりました。川崎市柿生地域では、直売所などで禅寺丸が枝に付いたまま売られていますし、禅寺丸ワインも販売されています。

禅寺丸は、生育が旺盛で、雄花と雌花の両方をつけることから、今では、「富有」や「次郎」などの甘柿品種の台木として用いられたり、これらの甘柿品種の雌花が安定的に授粉・結実する花粉供給のために、畑の隅に植えられる「授粉樹」として

の役割を果たしています。

800 年という長い歴史を経て、川崎から伊勢原に受け継がれた禅寺丸は、国境を超えてバリ島に植えられました。これらの柿の苗木が無事に育つことを祈りたいと思います。